



今月のPick Up! 品質チェックの自動化や実物と3次元モデルの 差分表示など、デジタルソリューションの 開発を推進ーアビスト

機械設計やシステム・ソフトウェア開発などを手がけるアビスト(東京都三鷹市)は、コア事業のアウトソーシングに加えて、第2の柱としてAI・ARなどを用いたデジタルソリューションの開発・提案事業に力を注ぐ。開発中のソリューションにはpluszero(プラスゼロ、東京都世田谷区)と共同で進める生成AI+3次元CAD技術+AEI(プラスゼロの特許技術)により品質チェックを自動化するソリューションや、AR技術を用いてiPad上で実物と3次元モデルの形状差分を表示するアプリケーションなどがある。同社では今後もデジタル推進部門を中心に独自のソリューションを開発し、顧客に提供していく考えだ。

3次元CADによる設計技術に強み

同社は2006年の設立で、主力はアウトソーシング事業(受託型請負・常駐型請負・派遣業務)。業界内では有能な人材を多数揃え、高度な設計力を持つ企業として評価されている。中でも、強みは業界に先駆けてハイスペック3次元CADといわれるCATIAを積極採用したことだ。CATIAは高精度で複雑な曲面をつくりやすいという特徴があり、自動車のボディなどの設計に適している。それにより、大手自動車メーカーをはじめ自動車産業や機械産業からの厚い信頼を得たことが今日の成長につながった。

その一方で、近年は大きな課題をかかえている。少子高齢化が進み労働人口が減少する中、有能な人材の確保と育成が年々、厳しさを増しているこ

とだ。「既存の事業だけではじり貧になってしまふ」と危機感を募らせた同社は、これまで培った設計技術を活かした新規事業の開発に活路を求めることにした。

事業の第2の柱

ターニングポイントはAIやDXなどの言葉が世の中に浸透し始めた2019年のことである。社内にAIソリューション事業を立ち上げ、さらに2022年にはイノベーションセンターを設立し、同社にとって第2の柱になり得るAIやARなどデジタルソリューション技術の研究開発を進めた。

「もともと当社は新しいことにチャレンジするのが社風」と話すのは、これらの事業を統括する執行役員事業本部デジタル推進部門長の山浦雅生氏である(写真1)。「創業時に先進技術だった3次



写真1 山浦雅生氏